のべるきゅあ☆

詞音歌ルビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
のべるきゅあ☆

【Ｎコード】
Ｎ５５７２Ｑ

【作者名】
詞音歌ルビ

【あらすじ】
全国のケータイ小説に大量のバグが発生した。バグに汚染された小説は、ストーリーが乱され消失する。”未空科学部”…この小説もバグによる影響を受け、乱れ始めていた。バグによる乱れを正そうとする未空学園一年、唐守（からす）とバグセキュリティプログラム、上波（あげは）たちによって繰り広げられる小説再生学園ストーリー。

アゲハ☆

ピピピピピピピ……

「……んんぅ～」

目覚まし時計で目が覚める、よくありがちな一日の始まり。大きく背伸びをして一息つくと、真新しい制服が目に入る。

「今日から俺も高校生か…」

そう、今日はこれから俺が通うことになる未空学園の入学式だ。

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

入学式の準備を済ませて外に出ると、澄み渡った空が俺を迎えてくれた。春の訪れを感じさせる暖かな空気……思わずため息が出てしまう。大きく息を吸い込み全身で春を感じていると、とととっ、と小さくて華奢な人影がこちらに走って……いや、飛んできた。

「カラスーっ！！！」

「ん？おぅアゲハ、おはよ……っ！？（ゴンッ）」

春休み明け早々、俺にクリティカルな頭突きを決めたのは俺の幼なじみ、上波知未（うえなみともみ）だ。くりっとした黄色い瞳とぴょんぴょん跳ねた黄色のショートヘアが印象的で、意味がわからないくらい活発なときがある。普通にしてたら結構かわいいんだけどなあ。

「おはよっ　ねぇ、頭で挨拶ってアリだと思わない？」
「頭突きはない……てかナシにしてほしい」

少しフラフラする頭を手で押さえながら答えた。頭で挨拶もあるのかもしれないが、それは額と額をちょっとくっつける程度のものだろう。痛みを伴う挨拶はお断りだ。

「ところでカラス、アゲハの紹介してるでしょ？自分の紹介はしなくていいの？」

そう言って、首を傾げて微笑みかけてくる。

「紹介って……誰に？」

コイツはいきなり何を言い出すんだ。アゲハの前で自己紹介してどうする？それより…

「…ってかどうして俺がアゲハのこと考えてたってわかったんだ！？」

俺は一言も口にしていない。まさか、頭突きされた拍子に思ってることが頭から漏れ出しているんじゃなかろうか……そんなことを考えているとアゲハは子どものように無邪気な顔をして答えてくれた。

「カラスのことはなんでもお見通しだよ？」
「…おっと」

頭を撫でようとするアゲハの手を咄嗟に防ぐ。なんでもお見通し

だよ、なんてよく言えるな？でも思っていることを知られたのは事実。本当に見通されてるのではないかと不安になってきた。

「マジでお見通しなのか……？」

「へへっ　嘘に決まってるじゃん　心配しないで――」

そっか、やっぱり嘘なんだ。

「――頭から漏れてるだけだから。」

ダッ！！！

近くにあった窓ガラスにダッシュした。自分を映して確認してみる。頭から漏れ出して……はいない。くそっ　アゲハめ、遠くでこっち見ながら笑ってやがる。

「おーいっ　早くしないと遅刻しちゃうよ？」

笑いを堪えているからか、声が小刻みに震えている。ったく、なんてマイペースなやつなんだ。初日から振り回されてる……うぅん、これは悔しい、悔し過ぎる。

「おぃ、ちょ待てって！」

飛鳥★

「やっと終わった……やっぱこういう行事って疲れるな。」
「そうだね～アゲハ肩凝っちゃったよぅ」
「おいおい、アンタは何歳ですか？まだ若……」
「おぃおぃっ　アンタとは失礼なこと言ってくれるなあ。アゲハはアゲハだよ？」

入学式、ＨＲを終えた俺たちは物理室へ向かっていた。なんでも俺に会わせたい人がそこにいるらしい。早く帰ってゲームの続きをやりたかったのに……

「でもカラスと同じクラスでよかった！」
「ふぇ？」

い、いきなりそんなこと言うんじゃねいっ！！！
変な声が出てしまったぞ……

「おやおや？お顔が赤くなってるですよ？カラスくん？」

アゲハが俺の顔を覗き込んできた。ちょっと照れたなんて言えるハズないし、黙っていても変に思われるだろう……何か言わなければっ

「もともとこンっ…」

……噛んだ。大事な言い訳だったのに……

「早く物理室行くぞっ！！！」

あーーーっ！！！　今すぐにでも逃げ出したい！

ガラッ

アゲハが勢いよく物理室の戸を開けると、そこには一人静かに本を読んでいる男がいた。

「飛鳥さんっ、カラスくんを連れてきたよ！」

「ありがとう、アゲハちゃん」

ふむ、この人が俺に会わせたいってやつか。さらさらな赤髪に澄んでいて優しい目、整った顔立ち、スラッとした長い足を持ち合わせ、大人びたオーラを放っている妬ましい男――――俺に会わせてどうしようってんだ？

「僕が妬ましいですか？」

「なっ！？」

微笑して男はこう答えた。また考えが漏れ出している？いやいや、それは違ったじゃないか。アゲハ同様、この男も俺の考えていることがわかるのか？そういうものなのか？偶然だと信じたいが、うぅ……頭が痛くなってきた。

「紹介が遅れましたね。僕は紅飛鳥（くれないあすか）。未空学園の3年生で科学部の部長をやっています。」

「あ　俺は唐守…」
「唐守説也（からもりときや）。１９９５年１２月１２日生まれ。小学生の頃から唐守（からす）と呼ばれていて、容姿・学力・運動能力は意外にも好評価。父親は単身赴任で、今は母親と中１の妹との３人暮らし。趣味は……」

紅先輩の口から次々に俺の情報が溢れ出す。とりあえずほっぺたを思いっきり摘んでみたけど……鈍い痛みが頬の上を這いまわる――――夢じゃない。

「…保健室行ってきます」

入学早々保健室のお世話になるとは思わなかった。でも早く診てもらわなきゃ、俺の頭は今とっても非常事態な気がするんだっ……

「待って、カラスっ！」

物理室を出ようとする俺の足をアゲハが勢いよく引っ張った。おい、どうしてくれる……手も出せず扉に顔面を強打したんだが。鼻先から猛烈な痛みが全身を一気に駆け巡る。先輩も笑ってないでちょっとは心配してくれたらいいのに。

のべるきゅあ☆

「カラスくん、君に話しておきたいことがあります。今日、君が感じた不可解な出来事にも深く関わることなんですけど。」

あ…鼻血出てきた。さっきまで笑っていた先輩の顔が急に真剣になった。不可解な出来事って俺の思ったことがバレていたことか？もしそうだとしたら、保健室に行かなくて済むかもしれない……鼻血は止まらないけど。

「聞かせてください。」

「カラスくん、タメ口で構いませんよ？そんなに歳も離れていないんですから。あと、僕のことは飛鳥って呼んでください。」

「う～ん　そうですか？…それで、話したいことってのは？」

「……」

しばらくの沈黙の後、飛鳥は携帯を開いて、俺に見せてきた。これは———ケータイ小説？

「ケータイ小説って知っていますか？」

「ああ、一度くらいなら読んだことある。」

本とかを読むのはあまり好きじゃない。だから、友達に教えてもらったときに少し見た、というだけだが。飛鳥は携帯を閉じて、窓の外を見ながら再び口を開いた。

「では、自分の住む世界がケータイ小説に描かれたものだという考えを持ったことは？」

俺は首を大きく横に振った。

「ないが……それがどうかしたのか？」

「信じられないとは思いますが、今僕たちのいるこの世界は、ケータイ小説”未空科学部”に描かれた世界なんです。そして、カラスくんはこの物語の主人公」

「アゲハたちは小説の外から来たんだよ？」

思わず少し笑ってしまった。こんなことを言うためにアゲハは俺をここに連れて来たのか？こんなことならさっさと帰ってゲームをやればよかった。

「信じてはもらえないでしょうけど、信じてもらわなければ都合が悪いのです。」

「無茶なことを言うな。それに、俺は15年間この世界でちゃんと生きてきた。誕生から今までの間をずっと描いた小説なんてあるはずがない！」

「それはカラスくんに植えつけられた記憶でしかないんですよ。僕たちはこの”未空科学部”のストーリーや設定を知っている。だから、カラスくんが僕たちを見たときどう思うのかくらいは簡単にわかりましたし、プロフィールだってすべて知っているんです。」

それでアゲハも飛鳥も俺の思ったことをわかったような素振りができた……ということか。たしかにそれならつじつまが合うのかもしれない。二人の目はずっと真剣だった。信じたくはないが、正直この世界が小説でないと断言することもできない。じゃあ本当に……

「飛鳥さん……美来（みらい）ちゃん、来るの遅くないですか？」

「そうですね……既にバグの影響を受け始めているのでしょう。」

今度は一体何の話だ？俺はまだちゃんと整理しきれていないというのに。

「まだカラスくんに納得してもらえていないようですが、仕方ありませんね。アゲハちゃん、カラスくんと一緒に美来ちゃんを探してきてもらえますか？探している間に美来ちゃんが来るといけないので、僕はここで待機しています。」

「わかった。美来ちゃん探しながらカラスに納得させちゃうね」

「ええ、お願いします。」

「行くよっ、カラス！」

アゲハは俺の背中を押しながら廊下に出た。物理室での一連の会話を聞いていると、二人の言っていることを信じるのが一番まともな考え方のように思えてくる。もしこれが嘘だったらアゲハとの縁を切ってやる。

主人公★

昼過ぎの学校の廊下は強くも柔らかい日差しに照らされている。今日は入学式だったからか、生徒の人影もあまり見られない。その美来って子はまだ学校に残っているんだろうか？などと思いながらアゲハに尋ねた。

「ところで、さっき話に出てきた美来ってのは誰なんだ？」

「天音美来（あまねみらい）ちゃん……ほら、アゲハたちのクラスにいたでしょ？空色の長い髪の毛で、大人びた綺麗な顔の女の子」

そういえばいたな……物静かで、和服がとても似合いそうだった。日本美人という言葉がピッタリなあの女の子のことか。

「すっごく頭が良くて、科学部でもいろんなもの作っちゃうんだから！……本当なら美来ちゃんのほうから物理室に来てくれるはずだったんだけど――」

「本当ならってどういうことだ？」

ちょっと興奮気味になっていたアゲハが急にうつむく。少し心配になってつい口をはさんでしまった。

「うん……さっき飛鳥さんがバグって言ってたでしょ？今いろんなケータイ小説でバグが発生してるの」

「そのバグが小説に影響を与えているのか」

「バグは浸食した小説のストーリーを乱す働きをするんだ。あまりにも乱されちゃうと、それは小説として成り立たなくなって消失していくの」

なるほど、そうならないために俺たちは天音を探さなければならないんだな。重たくなった空気を振り払うかのように、アゲハは俺の前に出て偉そうに胸を張ってみせた。

「アゲハたちは小説をバグから守るためにつくられたセキュリティプログラムなんだよ？それでね、小説に登場する人の身体を借りて活動してるの」

「そっか……でもどうして俺の身体を使わなかったんだ？そっちの方がいろいろやりやすいと思うんだが…」

「バグの実態がわかってないの。だから、可能性を秘めてる主人公のカラスにはそのまま残ってもらったってこと」

可能性を秘めた主人公……この世界を救う救世主……それがこの俺、カラスだ。なんだこれ！？俺めちゃめちゃかっこいいじゃないか！小さい頃からゲームが好きで、何度こういう世界に憧れてきたことか……はぅあっっ！！！ヤバい、嬉しい嬉しすぎる！！！

「？？？　大丈夫？カラス、震えてるよ？」

「ああ……俺、今すっげぇ興奮してるんだ。こんなの今まで感じたことなかった」

「楽しそうだねっっ　……よかったあ———」

胸を押さえて安堵のため息をはく。アゲハは何に安心しているのだろう？

「これでカラスがビビったりしたらどうしよっかなあって思ってたの。でもそんな心配無駄だったみたい（バシッ）」

「痛っってぇーーーっ」

そんなに強く背中を叩くなっ　と、言ってやりたかったが、アゲ

ハの満面の笑みを見たら何も言えなくなってしまった。それだけ嬉しかったんだろう。二人に期待されている…頑張らなくては！気合いを入れると、俺の足取りは自然と早くなっていた。

「おっしゃ、アゲハ。さっさと天音を見つけて科学部に入ってもらおうぜ！！！」

天音☆

「いないな。」
「いないね。」

俺とアゲハは手分けして校内を隈なく探し回ったつもりだったが、天音の姿はどこにも見当たらなかった。やはりもう帰ってしまったのだろうか……

「ねえっ、カラス！あれ見てっ」

急にアゲハが声を張り上げて言った。アゲハの指差す方を目で追っていくと、校門のところに空色の髪をなびかせている人がいた。髪が空色の人はそんなにいない。天音だ。

「ちょっと、美来ちゃん帰ろうとしてるんじゃないっ？急いで止めなきゃ！！！」
「おいっ！危ね……」

アゲハが間髪入れずに窓から飛び出した。ここ、二階だぞ？結構危ないことだと思うのに何の躊躇いもなく飛び出せたのは、自分の身体じゃないからだろうか？だとしたら、なんか迷惑な話だな……。そんなことより俺も追いかけなきゃ。急ぎながらも慎重に階段を降りて外に出た。

「ふにゅ～…」
「アゲハ！？　どうした、大丈夫か！？」
「……うん。一階だと思って飛び出したんだけど、思ったより高くて足くじいちゃった」

アゲハは足を摩りながら地面に座り込んでいた。俺が近づくと、心配させまいと思ったのか笑顔を振りまいてみせた。が、その顔は少し引きつっている。かなり痛いようだ。……一階と二階を間違えたことについてはツッコまないでおいてやろう。

「あなたバカね？一階と二階を間違えて飛び降りるなんて」

…っ！？　誰だっ！！！せっかくアゲハを傷つけまいと思って、言うのを抑えた俺のセリフをこうも簡単に口にしてしまうやつはっ！

「天音…美来？」

「私のこと、知ってるの？」

天音は顔色一つ変えずにこちらを見ている。マジか……俺のイメージと全然違うじゃないか。もっと口数少なくて、優しい口調で話してくれる子だと思っていたのに。

「おもしろいわね、あなたたち。あなたたちのようなバカを見てると、落ち込んでた気持ちも少し和らぐわ」

まったく失礼なことを言ってくれる。アンタを探していたからこんなことになったというのに。…まあアゲハが悪いのに変わりはないが。

「カラス、早く美来ちゃんに話さないと」

「いや、それは後だ。天音、アゲハを保健室に連れていきたい。肩を貸してくれ」

「どうして私がそんなことしなくちゃいけないの？」

断られた。まあそんなことは予想していたから問題ない。ここから俺の巧みな話術が炸裂する。覚悟しろっ、天音！！！

「手伝ってくれたらおもしろい話聞かせて……」

「興味ない」

腕を組んでプイッと顔を背けられた。まさか！？救世主のこの俺が敗れるなんて……　しかたない、奥の手だ―――

「お願いしますっ手伝ってくださいっ手伝わないとコイツ怒りますよ？アゲハっていうんですけど、怒らせるとマジヤバいんですって。一ヶ月入院確実ですからっあと話したいぅぐうっ！！？」

「カラスったら、アゲハのこと心配してくれるんだ……とか思ってすごく嬉しかったのに何！？一ヶ月入院確実！！？もぉ意味わかんない！！！」

「おい…首……そんな強く締めたら息が……」

「……付き合ってらんないわ。」

まったく無駄な格闘をしている俺たちに呆れたのか、天音はその場を立ち去ろうとした。

「「逃げるなっ！！！」」

俺とアゲハの声が見事に揃った。ん？どうしたんだ？天音の身体がプルプル震えている。いや、意識が朦朧（もうろう）としているから俺の目がぶれているのかもしれない。

「あぁーっもぅ何よ！？わかった、わかったからもう静かにしてくれない！？」

ご立腹のようだ。土下座して、頭ペコペコ下げて、アゲハに首締め上げられて、なんとか天音を説得させることができたな。とりあえず救世主としての役割を果たせただろうか。どうにも頼りない救世主だ。二人とも嫌な顔をしていたが、俺と天音はアゲハを抱えて保健室へ向かった。

勧誘★

「ありがとうな、天音」
「別に。それじゃあ私、帰るわね」
「ちょっと待って！美来ちゃんに話があるの。」

保健室を出ようとする天音をアゲハがなんとか呼び止めた。天音がこちらに振り返って冷たい視線を送ってくる。

「ひゃうっ！！！」

突然アゲハが俺の腰をつついてきた。くそっ、俺は腰がニガテなのに。変な声が出たじゃないか……恥ずかしなコノヤロー……

「急になんだよ？」
（後は頼んだよっ）

クスクス笑いながら小さい声でそう言った。天音を科学部に入れる。これは俺の仕事だ。しっかり任務遂行してやる。

「実は天音に頼みがあるんだ。」
「…頼み？」
「科学部に入ってもらえないか？」
「イヤ」

瞬殺。まさかこんなにも早く、しかも二言で断られるとは思わなかった……これでは粘りようがない。天音が保健室の戸を開けて出て行ってしまう。どうすればいい？なんとかして帰るのだけでも阻止しなければ……

「……飛鳥」

戸を閉めようとする天音の手が止まった。アゲハの声に反応したのか？

「美来ちゃん、飛鳥さんのこと…わかる？」

「あなたっ……飛鳥様のことを知ってるの！？」

天音の目が変わった。何かを疑うようで真剣な目。”飛鳥”という言葉を聞いて天音の様子が一変した。どういうことだ？

「飛鳥さんは今、科学部の部長をやってるよ？」

「うそっ！？そんなはずは……」

「今も物理室にいるはずだから会って聞いたらいいよ……あれ？」

「天音ならものすごい勢いで出ていったぞ」

アゲハが話し終わる前に、天音は目で追えないくらいの速さで保健室を飛び出していった。天音は飛鳥に何か恨みでもあるのだろうか？飛鳥の居場所を聞いた途端、すごい顔して走っていったからなあ。

「もう大丈夫よ、上波さん。でも今日は早く帰った方がいいわよ？」

「はいっ　先生、ありがとうございましたっ！」

「いぇいぇ、また遊びに来てね？」

「もちろんですっ！」

先生と遊ぶ約束をした（？）アゲハと俺はとりあえず物理室に戻ることにした。天音がどうしたのか、飛鳥がどうなったのか気になるし。

「カラス～　おんぶして？」
「ヤダ」
「もぅっ　アゲハは病人さんなんだぞ？」
「アゲハが悪いんだろ？ほら、肩貸してやるから」
「うぅ、わかった。肩で我慢する」

しぶしぶ俺の肩に掴まってくる。急に甘えてきやがって、おかしなやつだなあ。まあそこがアゲハらしいと言えばアゲハらしくてかわいいんだけどな。……そういえば――――

「そういえばアゲハたちはもう俺の考えてることはわからないんだよな？」
「うんっ、もうストーリーが完全に変わってるからね。全然わかんないよ？　もしかして何？バレたらまずいような恥ずかしいことでも考えてたの？」
「ち、違ぇよっ！バカじゃねえのか？」
「ははあ～っ　照れてる照れてる」

茶化すような目で俺を見るなっ。アゲハとこんなやりとりをしていると、いつの間にか物理室のすぐ近くまで来ていた。

ツンデレ☆

『職員室に行ってきます』
『あっ　私も行きますっ　飛鳥様ぁ！』

物理室の中から飛鳥ともう一人、女性の声が聞こえてくる。誰だろう？結構かわいらしい声をしてるから、どんなかわいい子なんだろうと期待してしまう。戸を開けてまず出てきたのは天音。やっぱり来てたんだな。頬を少し赤らめて物理室の中に視線を送っている。次に出てきたのは飛鳥。とりあえず天音に何もされていないようでよかった。まあちょっとつまらないが……っと今はそんなことどうでもいい。もう一人、どんな子がいるんだろう……　期待が高まるけど、あれ？出てこないな？…っ！！！まさか―――

「カラスくん、アゲハちゃん、美来ちゃんを探してきてくれてありがとうございました。ただちょっと別の問題が出てきたのでこれから職員室へ行ってきますが、一緒に来てもらえませんか。」
「そんなっ飛鳥様！？こんなバカたちも一緒に行くんですかっ！！？」
「…ダメですか？」
「んんぅ～　飛鳥様が言うのなら……」

やっぱりそうだ。天音は俺たちと話していた時とはまったく異なる話し方をしてる。やけにかわいらしい声を使ってベタベタしやがって。こいつはアレだな。所謂ツンデレってやつ。なんてわかりやすいんだろう。……それにしても別の問題ってなんだ？またバグの影響で何か起こっているのだろうか。

「飛鳥さん、別の問題って何ですか？」

「美来ちゃんが教えてくれたんですが、どうやら僕の名前が名簿にないそうなんです。」
「でもどうして天音がそんなこと知ってるんだ？」
「どうしてあなたなんかに言わなくちゃいけないの？」

天音が鋭い目つきで俺を睨みつけてくる。

「話してあげてくれませんか？美来ちゃん」
「はいっ！」

笑顔がはじけた。と思った矢先、すぐにいつもの天音の顔に戻って説明し始めた。

「ホントは恥ずかしいから言いたくないんだけど、飛鳥様のお願いだから話してあげる。ＨＲが終わったあと、飛鳥様に会いたくて教室を見に行ったわ。でもどの教室を探しても飛鳥様は見つからなかった。それで職員室に行って先生に名簿を見せてもらったの。それでも名前が見つからなくて……飛鳥様を追ってこの学校に来たのに、その飛鳥様がいないなんて……って落ち込んでたときにあなたたちが現れた。――こんな感じでいいですか？飛鳥様っ」
「ありがとう、美来ちゃん」

天音はちょっと俯いて恥ずかしそうにしている。めちゃめちゃ一途な女の子なんだな。飛鳥の前だとちょっとかわいく思えてしまうのがなんか悔しい。

「そういうわけで今確認に向かっている、ということなんです。」
「じゃあもしかしたら飛鳥は退学になっている可能性があるってことか？」
「う～ん、そう考えるのが普通かもしれないね……」

いくら考えてもしかたない。早く行って確かめるのが一番だ。

「もっと急ごうっ　みんな！」
「あっ　待って、カラス」
「急ぎましょっ　飛鳥様」
「そうですね」

みんなが一斉に職員室に向かって走り出した。今のみんなの気持ちは一つ。早く今の状況を確認して飛鳥をこの学校に残れるようにする。

勘違い★

俺は勢いよく職員室の戸を開けた。

「先生っ！ちょっと名簿を見せてもらえませんかっ？探している人がいるんですっ」

息を切らしながら俺は先生に尋ねた。先生も何事だ？という顔をしているが、何も聞かずに俺の質問に答えてくれた。いい先生だ。

「何年生の名簿が見たいんですか？」

「三年生ですっ」

（え…）

それを聞いた先生はすぐに名簿を取りに行ってくれた。誰かが何か小声で言ったような気がするけど、そんなことはどうでもいい。早く名簿をっっ！

「これですね、どうぞ」

「ありがとうございます！　飛鳥っ　クラスはどこ？」

「わかりません。」

「はあっ！？わからないってどういうことだよ！？」

「遅刻してきたんです。通学路のデータなんて小説にはほとんどありませんでしたから。」

「そうなのか、アゲハ？」

「うん。アゲハもカラスと一緒じゃなかったら道わかんなかったもん」

「じゃあしかたないな。一つずつ当たっていこう。」

Aクラス、Bクラス、C、D、E……なかなか名前が見つからない。次が最後のFクラスだ。緊張が走る。不安がよぎる。

「青木龍…赤井真由子……」
「栗田和馬……紅飛鳥…あったっっ　紅飛鳥っ！！！」
「ホントだあっ　よかったですね、飛鳥さん！」
「これは嬉しいですね」
「……」

職員室にも関わらず俺たちは思いっきり騒いでしまった。もし退学でもさせられていたら面倒なことになっていたからな。ホントによかった。そうなるとこれはバグによる問題ではなかったらしい。でもそれならどうしてこんなことになったのだろうか。……それは、騒いでいる中一人静かに息を潜めている人物に原因があった。

「飛鳥様って……三年生でしたっけ……？」
「「「……」」」

空白の数秒が流れた。どうやらバグは天音にはたらいていたようだ。天音を勘違いさせることで、科学部を乱そうとした。もしかしたら天音は学校をやめていたかもしれないのだから、勘違いは恐ろしい。

「ぷっ」
「今笑ったの誰？人の失敗を笑うなんてサイテーな人ねっ　絶っっ対許さないんだから！！！」
「おいっ　それで何で俺が狙われるんだよ！！？」
「理由なんて必要ないでしょ！？ちょっと！待ちなさいっっ！」

不安が取れたからか、天音に追いかけられるのもなんだか楽しい。

勘違いするなよ！？決して俺がおかしいわけじゃないぞ。コイツらとのこれからの生活を考えるだけでなんか興奮するんだ。

「まだかなり微小のバグだったようですね。」
「そうだねっ　でもこれから大変になっていくんでしょ？アゲハ、ちょっと不安だなあ。カラスもまだまだ頼りないし」
「でも僕は楽しいですよ？彼らと一緒にいるだけで。僕はこの科学部なら、なんとかできるような気がします。」
「アゲハが不安抱えてちゃダメだよね！んん～　アゲハもイケる気がしてきたっ　ありがとっ、飛鳥さん」
「どういたしまして。僕らもカラスくんに負けないように頑張りましょうね？」
「うん！もっちろん！！！」

こうして、俺、唐守説也の未空学園での新たな生活がスタートした。

説也☆

「……それでは、僕のチームが優勝すればいいんですね？」
「うむ、そしたら認めてやろう」
「ありがとうございます。来週、楽しみにしています。」
「9年無敗のわしらを打ち負かしてみぃ」
「ええ、それでは失礼します。」

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

未空学園に入学してから二日。入学してすぐ行われた実力テストを終えて、若干疲れを感じながらも早く科学部に顔を出したいという衝動に駆られていた。皆が帰る準備をしていると、我らがFクラスの担任、桜井香菜（さくらいかな）先生がこんなことを言い出した。

「え～っと、突然ですが来週の金曜日に球技大会をやります。どの種目に出たいか、月曜日までに考えてきてくださ～い。」

香菜ちゃんのおっとりゆったりとした声が教室に流れる中、黒板に種目が書かれていく。

≪男子≫サッカー・ベースボール
≪女子≫バスケ・バレーボール

なるほど、男女別で4つの種目に分かれて競い合うのか。ありがちと言えばありがちだ。うーん、やっぱりサッカーだな。俺は野球の守備がてんでダメだからな。

「あ～言い忘れてたけど、私たちFクラスは2・3年のFクラスと組むことになってます。先輩たちと交流を深めるいいチャンスだから、みんなうまくやってね？」

そう言って、今日のFクラスは解散した。足速に物理室に向かおうとする俺の肩を、誰かがつついた。ちっちゃくて幼くてかわいらしい顔をしている。雪村健斗（ゆきむら けんと）だ。中学の時に知り合ったのだが、その頃から容姿だけでなく、性格もなんだか子どもっぽいやつだ。

「ねえ、説也。説也はどうする？」

「そうだな……俺はサッカーやるつもりだけど」

「サッカーやるの？……そっか、じゃあ帰るね……」

そう言って寂しそうに背を向けて歩き出した。

「ちょっ…待てよ、健斗！野球の方がよかったのか？」

「？」

え……じゃあ健斗は――――

「……女子に混じって球技大会に出たい――――」

「みなさーんっ　ここに女子に混じってバスケやバレーやりたいって人がいまーす！」

「やめろ健斗っ！俺そんなこと一言も言ってない！誤解されちまうよっ」

人の話は最後まで聞くもんだろ？それになんてタイミングで話を切ってくれるんだ。『出たいのか？』って言うつもりだったのに。誰にも気付かれないように心にしまっておいた俺の気持ちが赤裸々

にされるてしまうなんて。てか健斗、どこからそんなメガホンを取り出したんだっ！？

「ねえ、説也何か勘違いしてるよ。これからどうするのか聞いたつもりだったのに、球技大会のこと答えてたでしょ」

「なんだ、そうだったのか。俺の早とちりだ。悪かったな。」

「気にしなくていいよ」

「ああ……って良くねぇよ。なんで俺が謝らなきゃいけないんだ！」

へへっと笑いながら、健斗がメガホンをズボンのポケットにしまおうとする。まさか！？そんなところに———

「あれ？入らないや」

入らないよな。常識だよこんなの。……常識だよな？あれ、でも変だぞ？何かが肩に減(め)り込んできてる。普通なら入らないはずなのに。

「カラス……さっきの、どういうこと？」

なるほど、アゲハが俺の右肩を潰(つぶ)しているのか。なるほど納得だ。アゲハなら常識の一つや二つ、簡単に覆(くつがえ)してしまうだろう。普段は活発な印象を与える上波知未(うえなみともみ)の跳ねた髪は、今では殺気を強調している。

「あれは健斗が勝手に言ってただけだ。だからその手を離してはくださらないでしょうかアゲハさん！！！」

俺もずいぶん必死だな。いや、でも全然大袈裟(おおげさ)じゃなくマジで痛

え……

「ふーん、そう。本当なの、ケンケン？」

おい……早く離してくれよ。健斗に真偽を確かめるのはそのあとでもいいだろっ？右腕壊れちまうってっっ！

「あ…うん、そうなんだ。ごめんね、上波さん」

「あっ　別に謝らなくていいよ。簡単に信じちゃったアゲハが悪いんだから。カラスがそんなこと言えるはずないのにね」

右腕の感覚がなくなってきて、やっと解放された。うぅ……後で保健室行ってこよう。それにしても健斗、オマエはどうして俺ばっかり弄(いじ)るんだ。俺以外が相手だとずいぶん消極的になるくせに。もしかして、友達……少ないのか？

肩の痛みばっかり気にしていたから気付かなかった。アゲハの後ろには天音美来(あまねみらい)が面倒臭そうな顔をしながら立っている。こちらは天真爛漫(てんしんらんまん)なアゲハとは対照的に、とってもクールでお淑(しと)やかだ……普段は、だが。

「そういえばアゲハ　足はもういいのか？」

「あ、ん～と……大丈夫みたい」

アゲハがきょとんとした表情をしている。足の痛みが引いていることに気付いていなかったのか？でも、どうやら一昨日(おととい)二階から飛び降りたときに捻った足は十分に回復したようだ。セキュリティプログラムだと治りも早いのだろうか。

「ねぇねぇ、アゲハたちこれから物理室行くんだけど、二人も一緒に行かない？」

「おう、俺はもともと行くつもりだった」
「そっか！ケンケンはどうする？」
「えっと……僕は……」
「もう、じれったいなぁ。行くよ！！！」

健斗は若干悩んでいたものの、アゲハに背中を押されて物理室に向かった。アゲハの半ば強制的な行動には少々驚きを覚える。

「俺たちも行こうか」

天音は大きな溜息をして歩き出した。そんな嫌そうにするなよ。俺が何かしたか？

科学部★

物理室の戸を開けると、触っていたノートパソコンを閉じて科学部部長の紅飛鳥(くれなめすか)先輩が俺たちを迎えてくれた。

「みなさん、お揃いですね」

「飛鳥さん　ケンケンも連れてき―――」

「飛鳥様ぁっ！！！会えて嬉しいっっ」

アゲハの声を掻(か)き消して、天音が飛鳥に飛びついた。今日もさっそくツンデレっぷりを発揮してるな。……っと、健斗が固まっている。かなり衝撃的だったのだろう。まあ無理もない。天音は普段とはまるで違う、別人のような振る舞いをしているのだから。

「すいません、美来ちゃん。話しにくいので、ちょっと離れてもらえませんか？」

「ふにゅ～……わかった」

すごく名残惜しそうに飛鳥の身体から離れる天音。しかし、いきなり付き合ってもいない男子に飛び付くなんて、コイツは常識が分かってない。飛鳥も避けようとする素振りを全く見せないとは、優しいのか女に甘いのか……う～ん

「みなさんは、球技大会の話は聞きましたか？」

「ああ、聞いたぞ」

俺が返事をするのに合わせて3人も頷(うなず)いた。

「球技大会が行われるのは今日からちょうど一週間後の金曜日。こ

の一週間の間にFクラスが優勝できるように、あなた方４人を鍛えます。」
「どういうことですか、飛鳥様？」
飛鳥の言葉にハテナ？を浮かべる３人。一週間かけて鍛えてまで優勝する理由が見当たらない。だが、アゲハは飛鳥と同じセキュリティプログラム、全て分かっているようだ。
「学園長に会ってきたんだね」
「ええ。科学部をつくるなら、球技大会で優勝するように、と言われました。」
「ちょっと待てよっ　科学部ってあるんじゃなかったのか？」
「うん、ないよ。見ての通り、わかるでしょ？」
アゲハがさらっと答えた。……確かに今ここにいるメンバー以外の部員は見てないし、顧問の先生だって知らない。飛鳥が科学部部長だと聞かされたからてっきり科学部はあるものだと思っていたが、これは部活が成り立っているような状態ではないよな。
「本来ならそんなに練習しなくとも優勝できるはずなのですが……」
「本来なら？」
鋭いな、天音は。おそらく飛鳥の言う”本来なら”というのは、この世界がバグに侵されていない状態のことを言っているのだろう。天音や健斗はここが小説の世界で、バグのせいで乱れていることは知らないから何の事か分からないのも無理はない。しかし、二人も同じ科学部で一緒に活動する仲間だ。このことはちゃんと話しておくべきだろう。

「本来ならっていうのはな、この世かぃうっ！……ぐふっ！？」

一瞬息が苦しくなり、俺は宙（ちゅう）を舞った。ふぅ～なんかふわふわする。……っと危ない危ない。

「おいアゲハ！いきなり何するんだよ！？身体と意識が飛びそうになったんだが！」

「身体は飛んでたよ」

「ああ、分かってる。だから何でそんなことするんだよ？」

「えっと……ほら、あれよ！よくあるでしょ、カラスを飛ばしたくなることっ」

「あるあるだよねっ」

健斗……オマエは俺の不幸がそんなに楽しいか？そんなことあるわけないだろ。てか、認めたくない。いきなり喉を突かれ、鳩尾（みぞおち）に張り手喰らわされるのがよくあることだというのなら、俺は人気（ひとけ）の少ないところでひっそりと生きてやる。

「喧嘩するほど仲がいいって言う」

「っ！？」

天音の言葉に反応して健斗が襲ってきた。なんとか健斗の拳は免（まぬが）れたが、受け止めた手が痺（しび）れる。華奢（きゃしゃ）なくせに力だけは無駄に強いな……

「喧嘩したら説也ともっと仲良くなれるよね？」

「ケンケン！それは喧嘩じゃなくて暴力だからやっちゃダメ！」

「そうなの？……うん、わかった」

俺以外が相手だとなんて素直なやつなんだ。納得いかんぞ、俺は。

とにかくありがとう、アゲハ。このまま健斗とやり合ったら俺の身体は持たなかっただろう。

「喧嘩はね、こうやってやるんだよ」

俺の生きる道は断たれた。逃げよう――――

「待って、カラスっ！」

物理室を出ようとする俺の足をアゲハが勢いよく引っ張った。ん？つい最近同じようなことがあった気がする。だが同じ過ちは犯さない。扉に手を付いて、顔面強打を避けた。

「甘いぞ、アゲハ。俺はそう何度も」

……俺の腕は伸びきり、手は扉の上をするすると駆け下りたと思った矢先、鼻先から猛烈な痛みが全身を一気に駆け巡った。

「ふぐぅ！」

そこまで引っ張られるとは思わなかった。くそっ、アゲハの方が一枚上手だったということか。それにしても俺ってこんなに運動神経悪いのか。普通手が先に床に着いて顔を打つことなんてないだろうに。

「足引っ張られたぐらいで顔を床にぶつけたりするかしら？普通手が先に――――」

「飛鳥！ごめんな、話の途中だったのに脱線させて」

天音の話を遮るように少し大きめの声で喋った。言うな天音。自

分で思うのはまだいいが、人に言われるのは避けたい。

「ありがとう、カラスくん。それでは、話を続けさせていただきますね。実はこの球技大会には、先生だけで構成されたチームも出場するんです。」

「先生たちも出るの？」

「ええ。これが一番厄介なんです。この動画を見てください。」

そう言って飛鳥がノートパソコンを開いて動画を見せてくれた。

最強の先生☆

『先生たちが相手だって』
『へえ〜　先生たちも面白いもの用意してくれるじゃん』

動画の中で未空学園の生徒が話している。どうやら優勝したクラスがこれから先生たちのチームと試合をするようだ。

「「「……」」」

『おいおい、負けてんじゃん！しっかりしろよ』
『ちょっとヤバイな……そろそろ一点くらい取らなきゃな』

野球の試合。結局１－０で先生たちのチームが勝ったが、先生たちも押されてたし、飛鳥が心配するほどでもないような気がする。

「……完璧ね」
「うん……すごい試合だった」
「アゲハたち、これに勝たなきゃいけないんだ」

なっ、みんな何か感じたのか！？もしかしてわかってないの俺だけ？まずい……何か言わなきゃ。

「す…すごかったな」
「ホントにわかってるの、説也？」
「あ…ああ。これくらい俺にだってわかるよ」
「じゃあ説明してみてよ」

健斗め……余計なこと言いやがって。まあいい、どうせ単純な回答でいいんだろ？

「普通なら生徒相手に先生が勝てたりしないだろうけど……」

みんな何でそんなに冷たい目で俺を見るんだ。

「やっぱわかってないじゃん」

「まあ無理もないでしょう。ほとんどの人が気付いていないのですから。」

飛鳥……それ、俺を励ましているのか？もしそのつもりだったなら教えてやる。俺は今、かなり凹んでいるぞ。ほとんど気付いていないといっても、この部屋にいる人は俺以外みんなこの動画を見て何かを感じている。俺だけ何も分かっていないというのはとっても……とっても辛いんだぞ。

「この試合、先生の思うように進行してるよね」

「その通りです。点差も大きくなく、見る限りいい試合をしているようですが、すべて先生方が生徒たちを楽しませるために図ってやったこと。それは球技大会を初めてからの9年間ずっと同じ。点数を取られた……いや、取らせたことはあったものの先生方が負けたことは一度もないですね。」

「そんな……ただ強いだけじゃないのか」

俺の予想を遥かに超えていた。この会話を聞く限り、並大抵の実力では絶対に勝てないようだ。先生たちが出場すること、そしてその異常なまでの能力……バグのせいか。天音の勘違いを引き起こしたバグと比べるとずいぶん厄介だな。

必勝法★

「練習の予定についてなんですけど、明日9時に僕の家に集まってもらえますか？」

いろいろ考えていると、飛鳥が練習の予定について聞いてきた。相手の実力があそこまで大きいとあまりのんびりしてはいられないから、飛鳥も時間を有効に使いたいのだろう。

「やるなら今日からの方がいいんじゃないの？」

アゲハが頬に手を当てて、不思議そうに尋ねた。確かにできる限り早く練習を始めた方が俺たちの力も伸びる。明日から、なんて悠長なことは言ってられない。

「それでは今日はみなさんだけで練習してもらえますか？僕は考えたいことがありますので。」

「勝つ為の作戦ですか？」

「ちょっと違います。僕が考えたいのは……」

「「「考えたいのは？」」」

みんなが口を揃えて言う。飛鳥は俺たちの目を順番に見て、小さな笑みを浮かべた。

「必勝法です。」

「ぷっ……ふははっ」

「ちょっと！？飛鳥様を笑うなんて、飛鳥様が許しても私は許しません！」

「わ　わりぃ、つい」

「つい、とはなんですか！？さあ、歯を食いしばりなさい！」

別に悪気があっていったわけじゃないんだが。やばっ、天音の拳が飛んでくる。

「美来ちゃん、落ち着いてください。今怪我でもされたら困ります。」

天音の一撃をしっかり受けた直後、飛鳥がそう言って天音を止めてくれた。

「そのセリフ、もっと早く言ってくれよ……」

そしたら俺は今こんなにボロボロにはなっていなかっただろう。てか飛鳥も口だけじゃなくて手を出して止めてくれたらいいのに。明らかに手の届く距離だったよな？

「ミライチャンオチツイテクダサイイマケガデモサレタラコマリマス」

「オマエは黙ってろ」

……健斗が飛鳥のセリフを三倍速で言った。早くってそういう意味じゃないことくらいわかるだろ？バカだろ。健斗オマエバカだろ。はぁ、笑うのも面倒臭い溜息しか出ない。

「そ…そうですね……今日のところは飛鳥様に免じて見逃してあげるわ。でも、球技大会が終わったら覚悟なさい！」

俺の寿命はあと一週間か……まだやり残したことたくさんあるからやっておかなきゃな。えっと、とりあえずまだやりかけのゲー

ムをクリアして、それからそれから……

「今日はこれで解散でもいいですか？僕も今は時間がほしいものですから。」

「うんっ　ありがとう、飛鳥さん。アゲハたちはアゲハたちでできることをしておくね」

「あぁ、飛鳥様。寂(さみ)しいです……」

「大袈裟(おおげさ)だな。明日すぐ会えるんだから寂しいことないだろ？」

「唐守は何も分かってない。私の飛鳥様に対する熱く蕩(とろ)け切ったこの想い」

いや、別にそんなどろどろしたものなんか分かりたくない。

鞄を抱えて物理室の戸を開ける飛鳥。戸を閉めようとしたところで

「机に置いてある紙、見ておいてください。」

と言い残して先に帰った。

分裂☆

飛鳥が言っていた紙ってのはこれか。Ｂ４サイズの紙が一枚。そこには球技大会の種目と俺たちの名前が書かれていた。

サッカー：カラスくん、健斗くん
ベースボール：飛鳥
バスケ：アゲハちゃん、美来ちゃん

これも勝つための選択なのだろうか。まあ、俺はサッカーなら何も文句はない。

「飛鳥様……どうしてですか」

天音の声が震えている。飛鳥の言うことならなんでも受け入れてしまいそうな煮えたぎった想いを持っているのに、ここに書かれていることに対して何か不満でもあるのだろうか？まさか、どろどろの想いをバスケ嫌いが上回ったなんてことはないよな。

「どうして私ではなく……上波さんの名前が先に書かれているのですかっ！」

なるほど。それでゴゴゴゴゴってメジャーな効果音が流れているわけか。

「美来ちゃん、落ち着いてっ」

アゲハ、オマエがそれを言ったら逆効果だぞ。ほら、天音の気がどんどん大きくなってる。一般人の俺でも感じることができるんだ

から、かなり強い気であることは確かだ。

「上波さん……あなた私に隠れて飛鳥様にくっついているんじゃない？」

「そ、そんなことしてないよ」

「嘘よっ　じゃあどうして私の名前の方が後なの！？」

「そんなの……アゲハ知らないよ」

「天音、もうやめろよ。いくらアゲハに問い詰めてもわかる訳ないだろ？」

「……」

天音は俺の肩を押して走っていってしまった。強く言ったつもりはなかったけど、傷つけてしまったか？……悪い、天音。でもアゲハは何もしてはいないんだ。それだけはわかってほしい。

「カラス……」

「何も言わなくていい。アゲハの言いたいことはわかってる」

「……」

俺の名前を呼んだ後、アゲハらしくもなく俯いてしまった。しかし流石に落ち込むか。アゲハだって女の子。友達とのトラブルに関しては、きっと深く考え込んでしまうのだろう。……アゲハの悲しそうな姿は見たくない。こういうときってなんて言葉をかけたら慰められるかな。

いろいろ頭を巡らしていると、机を強く叩く音がした。なんだ、この嫌な感じ。

「美来ちゃん怒って行っちゃったじゃない！このままバラバラになったらどうしてくれるの！？」

アゲハが顔を赤らめて怒ってる。これは予想外だ……完全に落ち込んでいるものだと思ってた。それになんか俺に責任負わされてるような言い方じゃないか！

「俺のせいかよ！？」
「そうだよ！カラスのせいっ」
「んなバカな！？」
「バカなんてよく言えるねっ！そんな適当な事言うのはどの口！？」
「おぃ、あえおっぇ！！（おい、やめろって！！）」
「説也、言いたいことかろうじて伝わったよ……」
「えぅお……（けんと……）」
「上波さん。もっと引っ張ってほしいって」

ダメだ。口を思いきり引っ張られていて母音しか使えない。しかも健斗が変な解釈をしたせいで、引っ張るだけじゃなくて口の内側と外側を指で強く押さえつけられているから余計に痛い。
必至に抵抗していると、気持ちが落ち着いたのかふぅ～と一息ついて、そのまま手も放してくれた。

「いってぇ　もしこれで俺の顔が変形してブサイクにでもなったらどうしてくれるんだ。みんな悲しむだろっ？」
「みんなって誰？」
「ん？えと……例えば、俺に好意寄せてる人…とか」
「ぷっ　いるわけないでしょ！？」（……アゲハとケンケンくらいしか）

酷（ひど）いこと言いおって。俺だって結構モテるんだぞ？……たぶん。
……最後小さい声で何か言われたような気がするけど、聞こえなくて正解だ。どうせ俺を貶（けな）していたに違いない。

「まあ、美来ちゃんなら飛鳥さんが科学部にいる限り離れたりしないと思うけどね。寧(むし)ろ人体に被害を受けるカラスの方がいなくなる可能性あるよねっ」
「殺人未遂で捕まってしまえ！！」

いなくなる＝俺の命が尽きる。何の躊躇(ためら)いもなくよく言ったものだ。

しかし、アゲハの言っていることはもっともだ。事実、俺の身体は心身共にダメージを受けている。今後もこういったことが続くなら、俺が崩壊するのも時間の問題だろう。だが、簡単にやられるわけにはいかない。このサバイバルで生き残るのは俺だ！

秘密★

そういえば、朝からいろいろやられたせいで身体の節々（ふしぶし）が傷んでいる。別に忘れていたわけではなく、タイミングを逃し続けていただけだ。今なら大丈夫だろ。

「保健室行ってくる」

「アゲハも付いてくよ。アゲハのせいで怪我しちゃったんだし」

犯行を認めやがった。だったら俺のことはどうでもいい。速やかに自首すべきだろう。

「いや、俺は一人で大丈夫だから、アゲハは警察言って来い」

罪を償（つぐな）ってほしいという理由もあるが、何より今日のアゲハは危険だ。一人で行った方が安し……ん？足に違和感が……何か乗ってる。アゲハの足だ。無言の脅迫か？無言の脅迫なのか、これ？『アゲハを連れてかなきゃ、足どうなってもしらないよ？』とでも言わんばかりの威圧感。

……しまった！今日のアゲハは危険なんだ！なのに俺はそんなアゲハの気遣いを流してしまうとは、なんて命知らずなんだ。

「アゲハが一緒に来てくれるなんて嬉しいなあ」

「感謝するんだよ？それじゃあケンケン、すぐ戻るからお留守番よろしく！」

「うん、行ってらっしゃい。」

（今日だけだ今日だけだ今日だけだ今日……）

物理室を出て、人気(ひとけ)の少なくなった放課後の廊下を歩く俺とアゲハ。アゲハが何か俺に話していたが、そんなのは無視して小声で自分に暗示を架けていた。サバイバルで生き残るだ？そんなの無理に決まっておろうが。今後こんな日が来ないように祈ることしか俺にはできない。

あっ、そういえばアゲハに聞きたいことがあったんだ。

「あのさ、アゲハ」

「ん、何？」

「俺がこの世界のことを天音と健斗に話そうとしたら吹っ飛ばされたじゃん？二人も同じ科学部のメンバーなのに話しちゃいけなかったのか？」

「うん」

アゲハは顔色一つ変えずに答えた。悪気があったら今の俺の言葉を聞いて『申し訳ございませんでした』な表情をするだろうに、一切(さい)顔色変えないってことはコイツ、俺を突き飛ばしたこと何とも思ってないのか？

「あのことは絶対に話しちゃダメ。カラスには話しておかないと科学部に入ってくれない可能性があったから。美来ちゃんは飛鳥さんがいれば大丈夫だし、ケンケンはカラスがいるからついてくるって分かってるから、二人には話す必要はないんだよ」

「なんか引っかかるな」

話したらいけないことに引っかかっているわけではない。俺に健斗がついてくるというのに何か寒気を感じたんだ。健斗は俺とただ仲良くしていたいだけだよな、きっと。うん、そうに違いない。じゃあこの嫌な感じは何だ？

そうこうしているうちに、俺たちは保健室の前まで来ていた。

癒里ちゃん☆

「癒里(ゆり)ちゃん、俺の肩大丈夫そう？」
「ええ。大丈夫よ。けど、どうしたらこんなふうになるのかしら？」
「それは、アゲハがこう……握り潰したんだ」

ジェスチャーを交えながら、肩が死にかけたときの状況を説明する。あぁ……思い出すだけでも震えてしまいそうだ。

「あらら。二人共仲がいいのね」

小さく微笑んでそう言ったのは、未空学園保健室在住の養護教諭、緑根癒里(みどりねゆり)先生だ。違和感を覚えたかもしれないがリアルな話で、ここに住んでいるらしい。保健室は区切られていて、生徒を診察する空間と『立入禁止　勝手に入ったら婿・嫁には行けなくしてアゲル？』と書かれた張り紙をしてある空間に分けられている。……勝手に入ったら一体何をされるのだろう。

アゲハが言うには、花の絵がちりばめられた薄い緑色の壁に四つ葉のクローバーで装飾された私物のベッドがあって、なんか自然の香り（？）がするんだとか。てか、いつの間に見せてもらったのだろう。癒里ちゃんはフレンドリーな性格だし、アゲハとは入学早々仲良くなっていたからな。部屋を見せてもらっていたとしても不思議ではない。

「ああっ　悔しい！ねえアゲハちゃん、もう一回やりましょ？」

三人しかいない保健室には、しゅっ、たっという静かな音だけが鳴り響いている。

「いいですよ。でも何度やっても結果は変わりませんけどね」
「そんなことないわ。今度は私が勝ってみせるんだから」
「おいアゲハ。健斗が待ってるんだ。早く戻ろうぜ？」
「ごめんカラス。あと一回だけっ　あと一回やったらやめるから。なんならカラスだけ先に戻ってて」

一体何をしているのかというと、連続した数字のカードを素早く出していき、先に手札のなくなった方が勝ちというトランプゲーム、スピードだ。
なぜそんなことをしているのか。実は昨日もアゲハがここに遊びに来ていて、今と同じようにスピードをやっていたらしい。しかし、その途中で怪我をした生徒が連れてこられて、癒里ちゃんは０勝１６敗という驚異的なほど見事に完敗したままやめざるを得なくなったそうだ。そのため、アゲハに再選を申し込んだというわけだ。

「あと一回だけだぞ？」
「うん」

そう返事をして、手札を切る二人。それにしても癒里ちゃん、これだけ負けてもまだ諦（あきら）めずに勝負を挑むなんて無謀にも程がある。さっきの一戦を見るだけでも分かる。二人の実力はアクションゲームとシュミレーションゲームくらいの差がある。……つまり、アゲハの方が圧倒的に強いということだ。いい加減勝てないと認めたらいいのに。いい加減手を抜いてやったらいいのに。
……言うまでもなくアゲハの圧勝に終わった。早く帰ろうとアゲハを急（せ）かして保健室の戸に手をかけた。

「癒里先生っ　ありがとうございました！とっても楽しかったよ」
「あらそう。それは良かったわね。私は全然全くもって楽しくなかったけど」

「一応言っておくが、アゲハとやり合うのはもうやめた方がいいぞ。二人の差は歴然だ。」
「いいえ、諦めません。今度はしっかりと作戦を練ってから挑戦するから、覚悟しておくことね」
「はいっ　楽しみにしてます！」

今にも破壊活動を始めそうなほどに険悪な表情の癒里ちゃんに対して、勝ち誇った極上の笑みを返すアゲハ。この戦い、いつまで続くのだろう。
一歩保健室から出ると、気分がとても良くなった。保健室の空気が重すぎたせいだろう。俺は保健室の戸を閉め、どこからか聞こえてくる声に耳を傾けた。

『あらかじめアゲハちゃんの座る椅子の足に切り込みを入れておいて壊れるようにしておく……いや、これでは壊れるタイミングが予測できないからダメね。じゃあお茶か何かを用意しておいて、わざと零すなんてどうかしら？そしたらアゲハちゃんの気がそれていい感じになるんじゃないかしら……』

……保健室の中から敗者が酷(みにく)くて卑劣な作戦を考えているような声が聞こえてくるのは、きっと気のせいなのだろう。

信頼★

「ねえカラス。一つ聞きたいことがあるんだけど……」
「何だ？」

保健室を出て歩き始めると、アゲハが口元に指を当てて尋ねてきた。

「飛鳥さんが『僕が考えたいのは必勝法です。』って言ったときにカラス笑ったじゃんね？そんな笑っちゃうような要素なかったと思うんだけど」
「アゲハ、ものまね下手だな……悪い」

アゲハの胸元にあったはずのボールペンはいつの間にか俺の首を捉えている。日の光がペン先を反射して、その輝きは今にでも喉を貫かんばかりの鋭さを物語っていた。

「あのときはな、自分がおかしくて笑っちまったんだ。」
「自分が？」
「ああ。なんか『僕が必勝法を考えてくる。』って聞いたとき、妙に身体が震えたような気がしてな。まだ会って間もないのに、飛鳥なら何でもできちゃうんじゃないかって思えてさ。不思議だよな」
「……カラス」
「ん？」
「カラスもものまね全然上手くないじゃん！しかもセリフも違うし」
「なっ！？別にいいだろ！」
「これならアゲハの方が断然上手だね！」
「言いやがったなコイツ！」

逃げるように物理室の方へと駆けるアゲハと、それを追いかける俺。みんな、廊下は走っちゃいけないからな。

帰還☆

物理室に戻ってみると、そこには先ほど飛び出していった天音の姿があった。天音は俺たちが戻ってきたのに気付くと、途端にアゲハの目の前に一枚の紙を突き付けた。

「これでいい。これでいいのよ。」

そう言って、天音はその紙を机の上に置いた。どれどれ、何が書いてあるのか見てやろう。

サッカー：カラスくん、健斗くん
ベースボール：飛鳥
バスケ：美来ちゃん、アゲハちゃん

……そうか。飛鳥に訂正を要求するために出て行ったのか。もしそうだと分かっていたら、アゲハとあんな言い争いをする必要はなく、『カラスはモテない』なんて酷(ひど)く悲しいことを言われることもなかった。なんか無駄に体力精神力使ってしまったな。

「ところでこれからどうするのかしら？私たちだけで練習するの？」
「うん。やれることは少しでもやっておこうよ」
「……まあ、そうね。飛鳥様のためですもの。練習しましょう」

「でも飛鳥様がいないとヤル気でないわね」と愚痴(ぐち)を零す天音だったが、練習には参加してくれるようだ。

「それじゃ、公園にでも行って練習するか」
「「「うん！（ええ）」」」

姉弟★

「「「じゃーんけーんぽんっ！」」」

俺たちは球技大会の練習をするため、学校の隣にある公園に来ていた。

しかし、ここはどこにでもあるような大きくも小さくもない、普通の公園。ボールなんて置いてあるはずもなく、学校に戻ってボールを取ってくることになった。

俺は『全員で行く必要はないから、じゃんけんで負けた人が取りに行こう』と提案してみたが、見事に一回目で負けたわけで、悲しいわけで、提案しなきゃよかったと思うわけで……

「それじゃあカラス、よろしく！」

「さっさと戻ってくるのよ！」

「頼んだよ！制限時間は5分。ゆっくりしてたら……」

健斗が豆腐を持った手を前に突き出し、俺の目の前で静かに潰してみせた。ツッコみたいところはあるがここは堪えよう。キリがないだろうからな。

とりあえず、のんびりしていると俺はあの豆腐のように意図も簡単に粉砕されることが分かったから、急いでボールを取ってくることにしよう。

『あー　ケンケン、豆腐もったいないよ』

『大丈夫だよ。ほら、ちゃんとボウルで拾ってあるから。今日の夕食で使うんだ』

『雪村くんって、いろんな意味ですごいわよね』

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

「バスケットボールとサッカーボールはっと……ん、あった」

運動場内にある体育倉庫。今は部活もやっているので倉庫の扉には鍵がかかっておらず、簡単に入ってボールを探すことができた。

倉庫の隣には体育や部活の顧問の先生用の個室があるのだが、今は誰もいないようだ。……仕方ないな。

「少しの間ボールお借りしまーす！」

誰もいない部屋に向かってそう言って、運動場へと出た。いつもなら職員室にでも行って、ボールを借りたいことを伝えてから持っていくところだが、今の俺にそんな余裕はない。今は時間との勝負。少しでも気を緩めたりしてしまったが最後、俺は豆腐になる。

「やべっ、急がねえと……」

校舎に取り付けられている時計の針は2時14分を指している。公園を出たのは2時10分くらいだったはずだから、のんびり歩いていたら確実にアウトだ。

「ちょっとキミ？」

「……！！」

「それ、この学校のボールよね」

ダッ！！

「ちょっ、待ちなさい！」

待ってられるか！健斗（たち？）に豆腐にされるくらいなら先生に怒られた方がましだ。それにあとでちゃんと理由を説明すれば、先生なら理解してくれるはず。

とりあえず時間内に公園に着けばいいんだ。それからなら職員室にでもどこにでも行ってやる。

あと少し……あと少しでゴール。だというのに、なかなか距離が縮まらない。何度空気を蹴っても前に進む気配がない。……あ、そうか。空気を蹴ってるからダメなんだ。俺もバカなやつだな。走るときは地面を蹴らないと……って、え？

「ふふっ。キミ、じたばたしてかっわい～」

「なっ！？」

気付くと襟を掴まれて、俺の身体は宙に浮いていた。足には結構自身あったのに、こうも簡単に追いつかれるなんて。

ぱっ、と襟を放され解放された俺は、恐る恐るその剛腕鉄脚をもつ先生を横目で見てみた。するとそこにいたのは先生とは思えないような小柄な女の子だった。声や口調からして女性であることは予測できたが、かわいい声とは裏腹にたくましい身体をしているとばかり思っていた。こんな小さな身体のどこに男一人持ち上げるほどの力があるのだろう。

なんとなく誰かに似ているような気もするけど、まあいいか。……てか

「なんだ、先生じゃなかったのかあ。」

「人は見た目だけで判断しちゃいけないよって教わらなかった？こう見えてもボク、未空学園で体育教師やってるんだから」

「君は冗談が上手なんだね。」

「いや、本当なんだよ」
「お兄ちゃんは忙しいからもう行くけど、一つだけ注意。」
「……聞いてる？」
「もう知らない人を急に持ち上げたりしたらダメだよ。」
「そろそろ黙ってくれないかなあ。あんまりボクを小学生扱いすると……」

少女（？）がトマトを持った手を前に突き出し、俺の目の前で静かに潰してみせた。うわ……潰れたトマトの赤い肉片と液体がボウルの中にぼたぼたとこぼれ落ちていく。これって……

「あ――――――っ！！」
「そんなに大声で叫ぶことないでしょ？それに心配しないで。潰したトマトはちゃんと今日の夕食で使うから」

「カラスーっ！どうかしたの？」

俺の叫び声を聞いてアゲハたちが公園の入り口にやってきた。んなことどうでもいい。それよりこの人……

「姉さん、こんなところで何やってるの？」

やっぱりそうなんですね。この変態っぷり、めちゃめちゃ類似してましたから。
俺の思った通り健斗とこの少女（？）、姉弟だ。

ドラゴンキング☆

「『何やってんの？』ってこのコが学校のボール勝手に持ってくから追っかけてきたのさ。健斗こそ何してるのよ？」
「球技大会に向けて練習をしよ……」
「上波さん！それは姉さんには言っちゃダメだよ……」

とっさに健斗がアゲハの口を押さえた。普段見られない焦った健斗ってのは新鮮だなあ。でもどうしてそんなに動揺するほどお姉さんに知られたくないんだろうか。
『ボクも一緒に練習参加する！』とか言い出すのが怖いのだろうか？それとも練習しているところを見られたくないとか？

「そりゃ聞かれたくないよね。敵となるチームのエースに練習風景を見られちゃう可能性が出てくるんだから。」
「「「エース！？」」」
「うん。ボク、雪村ひかりは未空学園”Ｄｒａｇｏｎ　Ｋｉｎｇ”のエースやってるんだ」

な、なんか名前かっけーっ！竜神！？竜神ですか！？クラスごとにチーム分けされてるから、てっきり”グループＦ”とかいう名前が付けられてるもんだと思ってた。好きにチーム名決めれるんだ。
じゃあ俺も名前考えとこうっと。えーと……”Ｉｎｆｉｎｉｔｙ”とか、”Ｖｉｃｔｏｒｙ”なんてどうだろう。”Ｋｎｉｇｈｔｏｆ　Ｋｉｎｇｄｏｍ”なんてのもいいかも。
「雪村さんは何クラスのチームなの？」

俺が自分の世界に浸っていると、天音がひかりちゃんに気になっ

ていたことを尋ねてくれた。あの運動神経だ。どのチームにいるのか分かれば少しは対策を立てられるだろう。これは是非聞いておきたい。

「ボクはね、教師チームだよ」

「まーた先生先生って嘘言って。さっきからそればっかり――――」

（ドスッ）

「――――言ってすいませんでしたあああぁぁぁっ」

がんばれっ……ひかりちゃんと地球の間でぺったんこになった俺の左足……

でもでも信じられないだろっ？見た目は子ども、頭脳は変態な先生なんて聞いたことねえもん。アゲハと天音も驚いた顔してるし、俺がこれだけ疑うのも無理ないと思う。

「はい、これボクの免許証。教師である証明はできないけど、これでちびっこの扱いするのはやめてもらえるでしょ」

俺、アゲハ、天音がひかりちゃんの免許証に目をやる。どれどれ、何歳なんだ？

「……２４歳」

「ちょっと～ボクの年齢見ないでよー」

「『見ないでよー』って、他に何見たらいいんだよ！？」

「口答えするコにはおしおきだよ」

「何するつもりだ！ちょっ、こっち来んなよ！」

「冗談だよ冗談！その慌てっぷり、かわゆいなあ。からかいがいがあるよっ」

「姉弟揃って……」

これはもう遺伝子レベルで雪村姉弟は俺を食おうとしているとしか考えられない。

「それにしても二人って顔も性格もすっごく似てるよね。アゲハも妹いるけど全然似てないし」

「よく似てるって言われるんだけどさ、そんなに僕と姉さん似てるかな？正直こんな変態と一緒にされるの嫌なんだけど」

「姉に向かってなんてこと言うのさ！あんたの方が変態でしょ！？」

「僕の方が絶対ましだって！だって姉さんは超変態だもん」

「ボクが超変態だって？笑わせてくれるなあ。だったら健斗は変態ｅｓｔだっ」

「何だって！？」

「何さ！？」

「あ～面倒臭い……」

面倒臭い。天音の言うとおりだ。まったくこの二人、子どもの喧嘩かってんだ。

でもお互い自分のことよく分かってるじゃないか。……自分が変態だって。

「これじゃあ埒（らち）が明かないや。ねえ健斗、アレで決着つけよう？」

「いいよ。今日こそ僕が勝ってみせる！」

「「「……」」」

強い風が吹き、砂が舞う公園の真ん中で背を向け合う健斗とひかりちゃん。二人の顔は真剣そのものだが、この姉弟がやることだ。

一体何をするつもりなのだろうか。想像するだけでなぜか俺の方が身震いしてしまう。

「１０数えながら歩を進めていく。１０数えたところで振り返って先に」

「わかってるって。昔から何度もやってるんだから」

どうやらハリウッド映画とかでやってる決闘（？）みたいなことをやるらしい。拳銃らしきものは持ってる様子はない。しかしどこからともなく物を取り出してしまう人たちだ。どんな戦いをしてもおかしくはない。

「「みんな、１０数えてもらえる？」」

雪村姉弟から声がかかった。みんな不安なのか、俺と同じようにいろいろ考え込んでしまっていたようで、反応に遅れてしまった。

「ん？ああ、わかった」

「それじゃあ数えるよっ」

「「「「1……」」」」

お互いに一歩前に歩み出し、二人の背中が離れる。

「「「「2、3、……7、8……」」」」

あと二歩……

「「「「9……」」」」

ごくっと唾が喉を通る音が鮮明に聞こえてくる。あと一歩。あと一歩で何かが起こる！

「「「１０！！」」」

「「はあああぁぁぁっっ！！」」

二人は同時にざっ、と強く踏み込み身体をひねった。さあ、何を出すんだ！？

「「くらえぇぇぇっっ！！」」

腕を大きく振って投げだされたのは……なんだ？なんかひょろひょろしたものが見えるけど……まさか、麺！？

淡く黄色い麺の塊は相手めがけてまっすぐ飛んでいく。なるほど、あれをぶつけた方の勝ちか。おかしいことに変わりはないが、思ったよりも危険じゃなくてホッとする。

（バチャッ）

安心しきっていたからか？二人が懐（ふところ）からスープの入ったラーメンの器を取り出したのに、一切危機感を覚えなかったのは。

俺が甘かった。もっと注意していればこんなことにはなっていなかったはずだ。

「くっ、また負けた……」

「甘いね、健斗。ボクに勝ちたかったら麺を１０００本くらい増やしてきなよ！」

どうやらこの対決は、相手が投げつけてきた麺をどれだけこぼさずに器でキャッチできるかというものだったらしい。ひかりちゃん

の方はスープを数滴こぼしただけで、麺は完璧に器の中に収まっていた。
一方健斗はというと……
「説也、スープ全部かけちゃってごめんね」
「なんで俺だけスープ塗(まみ)れなんだよっ！」
麺をすべてキャッチするかわりに、スープは俺が全身で浴びていた。
「健斗……オマエわざとやっただろ。」
「うん！」
「ちょっとずるいよ健斗。ボクもかけたかったあ」
「ふふん。この件に関しては僕の勝ちだね」
「あ～っ　悔し――――っ！！」
「二度とこんなことやるんじゃねえええええええっ！！」

お着替え★

「それじゃ、ボクはそろそろ学校戻るよ。別にみんなの練習見る必要もないからね」
「それ、どういうことなんですか？」
「ボクたち強いから。むしろキミたちがボクたちの情報を集めた方がいいんじゃない？」
「大丈夫。俺たち、調査もちゃんとしてるから。覚悟しとけよ？俺ら絶対勝ってやるから」
「へへっ　そっか！お節介だったね。にゃうにゃう」

ひかりちゃんは俺たちに背を向けて手を振り、学校へと帰っていった。
『絶対勝つ』と言ったものの、本当に大丈夫だろうか。ひかりちゃんの運動神経は半端ないことを身を持って……身を持ち上げられて知った。他の先生の能力も高いって話だから、かなり辛い戦いになるのは間違いない。ここにいるアゲハ、天音、健斗も運動神経はいい。だがひかりちゃんに勝るものではないだろう。
つまり、能力では俺たちの方が劣っているわけだ。……だがー
ー

「カラス、何にやにやしてるの？」
「俺そんなににやけてたか！？」
「ええ、気持ち悪いほどに」
「そうか……いや、飛鳥の必勝法ってのが気になってさ」

そう。俺たちには飛鳥がいる。飛鳥が必勝法を考えてくるって言ったんだ。ドラゴンキングにだって絶対に勝てる！

「まあそうだよね～。先生たちあれだけ強いのに必ず勝てるって言ってるんだもんね」
「うん、僕も気になるな、姉さんを負かせる作戦。試合が楽しみになっちゃうよ」
「それより唐守、その服早く着替えてくれないかしら？臭って仕方ないわ」
「んあっ　そうだった！」

急いで公園のトイレに駆け込む。今日は体育の授業があったから助かった。これから練習もするんだし、ジャージはちょうどよかったかもしれないな。

「……なあ」

（ササッ）

トイレの中の俺に送られる視線。振り向いて声をかけると、覗き魔はスッと影に隠れた。だが、誰が覗いてるのかはすぐにわかった。

「アゲハ、そんなところで何やってんだ？」
「（ビクッ）な……なんでわかったの？」

アゲハは隠れたまま答えた。うーん、だって

「中を覗いてるアゲハの姿が鏡に映ってたし、それにうまく隠れたつもりだったかもしれないけどほら、そこ窓じゃん。アゲハのその特徴的な髪型が窓に影になって映し出されてるから」
「ち、違うからねっ！別にカラスの着替えが見たかったわけじゃなくてーーー」
「俺の着替えなんて見て、どういうつもりだ？」

「違うって言ってるじゃん！」
「……興味あるのか？」
「まあないって言ったら嘘になる……じゃなくて、これっ！」
そう言ってアゲハは俺の手を持ち上げ、ビニール袋を渡してきた。
まずい……せっかく持ってきてくれたのに覗きだと疑うなんて。

グッ……

「何身構えてるの？」
「え、殺らないのか？」
「そんなことするわけないでしょ？試合も控えてるのに怪我されちゃ困るって言われたもん」
言われてなきゃ殺られてたのかな。
「それよりカラス、アゲハに言うことがあるでしょ？」
「ああ、そうだな」
着替えている俺のために男子トイレにビニール袋を持ってきてくれたアゲハに今言うべきことは……
「健斗に持ってきてもらったら疑われることなかったのにな！」
ピシュッ（鼻ピン）
あ、今言うべきは『ありがとう』だった。
「鼻なら……折れても大丈夫だよね？」
「ご、ごめ……へぁっ……ハクショイっ！！」

「ぷっ、鼻むずむずした？」
「はっ……へっ……へんぷっ！」
「変なの～無理に堪えようとするからだよ。」
「あ～ちくしょう！止まれぃックション！！」
「それじゃあカラス、アゲハは二人のところに戻るから。早く着替えてくるんだよ？」

そう言うと、アゲハは小さく手を降って男子トイレを出ていった。
どうやらくしゃみのおかげで鼻をへし折られるのは免れたようだ。
よかった……くしゃみよ、ありがとう。

「それにしても……」

べたべたになった学生服を脱ぎ、体育のジャージに着替えながらさっきのアゲハの行動について考えた。
どうしてアゲハが袋を持ってきたのだろう？普通に考えたら、健斗に任せると思うんだが。……もしかしてアゲハのやつ、二人にいじめられたんじゃ……

『ねえ上波さん』
『なに、美来ちゃん？』
『はいこれ、ビニール袋』
『？？』
『唐守の服、すごく汚れてるからこれがないと困るでしょ？持っていってあげて』
『いや、でもカラス今着替えてるんだよ？ケンケンに任せた方がいいと思うんだけど』
『僕が持ってってもつまらない。上波さんが行った方が面白いと思うよ』

『そっか。それじゃあ行ってくるねっ！』

アイツ、きっと自分の意思で来たな。俺の着替えに興味があるってのも満更じゃないのか……もともと変わったやつだと思ってたが道を踏み外したな、アゲハ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5572q/

のべるきゅあ☆

2011年10月8日16時56分発行